

「現地を訪問して想うこと」

平成13年 経済学部卒 秋月 圭輔

東北応援ツアーから帰り、今回の行程を地図で眺めると随分と長い距離を移動したのだと改めて実感しました。

視察の中で一番、印象に残ったことは震災学習列車です。車窓に広がる釜石市・大船渡市の風景を見て感じたことは、震災は過去の話ではないということです。海岸沿いの風景は、整地作業の真っ只中で、重機と仮設の建物が並び、今から開発が始まる区画整理地を見ているようでした。

震災から5年がたち、震災の面影は薄らいでいるのでは、と思いながらの視察参加でしたが、復興は現在進行形の問題なのだと実感することとなりました。

また、視察の間に読んだ岩手県の新聞には、探すこともなく、復興関連の記事が幾つも見つかりましたが、地元に戻り、「復興」という文字がどこにも無い新聞を見て、現地と他地方の温度差を感じました。

私は地方の市役所で勤務をしています。一般的に行政主導の震災復興はインフラ整備を中心に行われるように感じます。しかし、最低限のインフラ工事を終えてから必要なことは、労働人口減少に歯止めをかける取り組みやダメージを受けた地域コミュニティの再生など、ソフト面の施策なのではと考えました。12mの高さまでそびえ立つ堤防は、行政の立場から言えば、住民の命を守る不可欠なものであり、住民の立場から言えば、素晴らしい海の景観を遮断するものとなります。どちらが正しいかの答えは出ませんが、堤防は海と住民を分けるだけでなく、行政と住民の立場の違いを表す壁でもあるように感じました。

自分が不勉強であり、現地の公務にあたる方は十分にそのような配慮をされていることと思いますが、自分自身が被災地の職員になったときにどのようなことをすべきか。考える契機を与えていただきました。

今後、自分が被災地のために力になれることは、再度、東北を訪れることや東北産品を購入することしか思いつきません。微力にもならないことは重々承知ではありますが、被災地のことを忘れることなく、少しでも自分にできる行動をしていきたいと思っています。

最後にこのような素晴らしい機会、経験を与えてくださいました事務局の皆様や、快い笑顔で迎えて頂きました岩手県校友会の皆様にご心から感謝を申し上げます。